



ほうれん草の主な病気と対策について

【指導員】 園芸課 菅原 大

今回は、管内でハウス栽培がメインであるほうれん草が、かかりやすい病気とその対策について紹介します。予防と対策をしっかりおこなない、高品質なほうれん草を作りましょう。

【主な病気・対策】

萎凋病（フザリウム菌）

発生の原因はフザリウム菌というカビの一種で土壌病害です。本葉4〜6枚、草丈10cm頃から収穫期にかけて発病し、下葉が黄化し、衰え、萎んでいきます。病気が進むと最終的に枯死します。発病適温は27〜28℃と、夏場の高温期に発生しやすく、酸性土壌でも発生しやすい傾向にあります。連作による菌密度の増加や土壌条件により被害が拡大します。菌は土壌で長期間生き続けるので、一度発生してしまうと翌年も再発します。

予防と対策

- ◆ 消毒をした加工種子の利用や耐病性のある品種選定をしましょう。
- ◆ 有機質肥料を施用し腐植の多い土作りをしましょう。
- ◆ 予防、また病気が多発した場合などは、土壌消毒剤

（クロールピクリン・バスアミド）を使用しましょう。極端な乾燥、多湿は避け、排水の良い畑作りをしましょう。

◆ 使用した農機具をよく水洗いすることで他の畑への感染が予防できます。

◆ 極端な酸性土壌の場合は、苦土石灰などを施用し、pH6.0〜6.5に改善しましょう。

立枯病（ピシウム菌）

こちらもピシウム菌やリゾクトニア菌などによる土壌病害です。葉の黄化、株部分の褐色化、茎のくびれや腐敗などの症状がみられます。主に発芽直後から本葉展開期頃までの生育初期に多く発生します。菌は多湿を好むため、梅雨や秋雨の時期には特に注意が必要です。萎凋病と同様に菌は土壌にいます。また、株腐病、根腐病など症状が類似

した病気も多数存在します。

予防と対策

- ◆ 萎凋病と同様に土壌消毒、または太陽熱消毒で被害を軽減できます。
- ◆ 薬剤防除として、タチガレン粉剤（播種3日前〜直前・土壌混和）**根腐病にも効果**があります。



▲萎凋病に侵されたほうれん草

べと病（糸状菌）

最初は、葉表の色が不規則に抜けてきます。一見すると栄養分の過不足により生じる「まだら症」と見間違えう場合もありますが、葉裏を見るとネズミ色のカビが見られ、高湿度の条件で発生しやすく、空気伝染します。一度発生すると、他の株に病斑が見えなくても蔓延している可能性が高く、出荷後の袋内で病斑が発生したりすること

もあります。



▲葉裏に発生した病斑

予防と対策

- ◆ 抵抗性を考慮した品種選定をしましょう。
- ◆ ハウス内の換気をおこない湿度を低下させましょう。
- ◆ 厚播きをすると株が密集し、湿度が上昇するので避けましょう。
- ◆ 薬剤散布（レーバスフロアブルなど）による治療が可能です。



今回紹介した薬剤は一例です。使用の際はラベルに記載されている使用上の注意をよく読み、用法を守って正しく使いましょう。